

「孤独なる人間」

——武田泰淳と魯迅——

王 俊 文*

【要旨】 本稿は、独自の魯迅批評で著名な竹内好の親友であり、戦後文学を代表する作家でもあった武田泰淳の魯迅観について考察するものである。その際、先行研究では取り上げられていない小説や対談なども検討し、泰淳の総体的な魯迅観を明らかにしたい。とりわけ、泰淳の作品「声なき男」と『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』に現れた「孤独観」に焦点を当て、泰淳と魯迅との対話を検討する。そのことにより、泰淳の実存的な孤独観と、愛する対象に裏切られる宿命に耐える「絶望的な抗戦」を融合させる泰淳の魯迅受容の一面を解明したい。

はじめに

これまでの研究において、武田泰淳の魯迅観は殆ど注目されてこなかった。その一因は、彼の親友である竹内好の魯迅論が圧倒的な影響力を持っていたことが考えられる。だが、藤田省三は、問題を提示する竹内の能力を賞賛する一方で、「『なぜ』の発生を除いた魯迅の理解度なら武田泰淳の方が遥かに当を得ていた」と述べ、泰淳の魯迅観の重要性を指摘している。¹⁾

このような二人の能力の差異は、既に二人の最初の魯迅論に現れている。例えば当時、郁達夫に熱中していた竹内は、魯迅を反近代性、思想の清算されることなく新しい事態に適應する功利主義の代表と見なし、「深さに於て」郁達夫に劣ると批判した。²⁾ だが泰淳は、魯迅における政治の接近は彼の文学を豊かにするものだと評価している。³⁾ 泰淳の魯迅観はこのように独特のものであったが、これまで殆ど考察されていない。

そこで本稿では、泰淳の評論や発言を検討し、彼の魯迅論の総体的な特徴を明らかにしたい。更に、泰淳の小説「声なき男」⁴⁾ と『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』⁵⁾ を取り上げ、創作の動機や手法から、泰淳文学に於ける魯迅との対話を検討する。その際、「孤独」という彼独自のテーゼにおける魯迅への接近に注目した。魯迅との対話を通じて、泰淳はどのような人間観と文学者像を形成するに至ったのかについて究明したい。

*非常勤講師／日中比較文学

一、泰淳の魯迅論

泰淳が初めて魯迅に触れた文章は、「昭和十一年における中国文壇の展望」(『支那』1937.1)である。彼は国防文学論争における魯迅を「最後まで自分の不屈な精神をもちつづけ、浮動する軽薄な分子のなかにあって孤独のごとく、しかも広大な光明を与える燈台にも似て立っていた」と述べ、魯迅＝「孤独な燈台」というイメージを描いている。その二ヶ月後、泰淳は最初の魯迅論である「影を売った男」を発表した。それ以降、泰淳は魯迅に言及しつづける。以下、泰淳の魯迅に言及する主な作品・対談である。⁶⁾

① 日中戦争前

「昭和十一年における中国文壇の展望」(『支那』1937.1)

「影を売った男」(『大魯迅全集月報 (2)』1937.3)

② 日中戦争中

「抗日作家とその作品」(『文芸』1937.9)

「小田嶽夫『魯迅伝』」(『中国文学』73号1941.6)

「学生生活」(『中国文学』77号1941.10)

「中国人と日本文芸」(『国際文化』27号1943.9)

「中国作家諸氏に」(『新潮』1943.10)

「『魯迅』跋」(『魯迅』1944.12)

③ 日中戦争後～文革

「中国文学の路」(『群像』1946.12)

「美しさとはげしさ」(『桃源』1947.1)

「中国文学と人間学」(『望郷』(5)1948.4)

「L恐怖症」(『近代文学』1949.9/10合刊)

「中国の小説と日本の小説」(『文学』1950.10)

「『孔乙己』感想」(『文芸』1953.1)

「魯迅とロマンティズム」(『中央公論』1953.12)

「女神と泥人間」(『毎日新聞』1956.5.16)

「薇を喰わない」(竹内好との対談『世界』1956.6)

④ 文革後

「魯迅とは何者なのか」(岩波版『魯迅選集』内容見本1966.9)

「魯迅死後30年に思う」(『東京新聞』1966.10)

『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』(『展望』1967.4～1967.9、1968.3)

「魯迅と秋瑾」(『世界文学・月報』1968.6)

『日中の原点から』(竹内好・堀田善衛・木下順二との対談1970.4.9)

『対話 私はもう中国を語らない』(堀田善衛との対談 1972.10)

「魯迅先生と私」(『魯迅展図録』 1976.10)

管見の限り、「武田泰淳と魯迅」というテーマの研究は少なく、概当するのは兵藤正之助(「武田泰淳と魯迅」と竹内栄美子(「武田泰淳の『中国』——魯迅と竹内好と——」『アジア遊学』第53号 2003.7)の二本のみである。竹内論文は、竹内好や中国文学研究会の影響と戦争体験という二つの面から、泰淳の中国観を検討したものである。泰淳が竹内好と魯迅を重ねていたことや、「影を売った男」、泰淳の戦地経験に関する分析は興味深い。だが、指摘は部分的であり、泰淳の総体的な魯迅観を明らかにしていない。兵藤論文は、泰淳の魯迅論と泰淳に対する魯迅の影響(ものの考え方及び人間形成)という二つの部分に分けて論述を展開しており、示唆に富む研究である。

但し両者の分析は、魯迅の「中国」に根ざす深さに対する泰淳の態度を考慮していない。また、両者はともに泰淳と竹内の共通性を指摘するのみで、その差異の検討を行っていない。泰淳が空間的、混沌、多元志向である一方、竹内は時間的、潔癖、一元志向であり⁷⁾、この差異は彼らの魯迅観に反映しているという点に鑑みるに、泰淳と竹内において重要なのはその差異ではないだろうか。本稿ではこれらの先行研究を踏まえ、泰淳の魯迅観を考察したい。

泰淳は「『政治と文学』の問題は文学者の生き方の問題」という認識に基づき、日本の文学者の政治に対する態度と比べ、魯迅は「文学者の生存のための問題『政治と文学』の問題を身を以て示した」、「政治に近づく事は『文学』=影を無限に豊かなものにする事であった」と高く評価している。⁸⁾

この「政治と文学」の矛盾統一という視点において、泰淳の魯迅観は竹内好の1944年版『魯迅』(日本評論社。1936年の「魯迅論」ではなく)と共通している。しかし1936年当時、竹内は「現世に隔絶された文学の絶対価値を追った」文学者としての魯迅を重視するのみで、政治との関係については「新しい客観世界での苟合的統一に安んじているに過ぎない」として、魯迅が文学者の態度を崩さなかったと言う保留付きの消極的な評価しか与えなかった。⁹⁾だが後に竹内は「政治と文学」の「絶対矛盾的自己同一」という別の観点から魯迅を評価し始めており¹⁰⁾、竹内こそ泰淳から影響を受けた可能性があると言えよう。

泰淳の魯迅観の根底には、彼自身の文学者としての生き方を問う姿勢があったと思われる。泰淳は、魯迅の作品を読むと、「何か僕らの心根をグサリとつき刺し、面の皮をへぎとったような気がした」と言う。(小田嶽夫『魯迅伝』1941.6)魯迅は「言論を吐くインテリ」に対しては、とことんまで許さぬのだな。一回も許してない。あれがぼくは実に骨身にこたえるな(対談「薇を喰わない」1956.6)という。それゆえ、「ぼくらアジアの知識人の一挙一動は、すでに彼の眼光によって、見ぬかれている。『ロジンがオレを見抜いているゾ』というはずかしさにつつまされて読むのが、一ばん正しい読み方かもしれない」。(「女神と泥人間」1956.5)

泰淳の魯迅に対する畏怖を一番表現している作品はタイトル通りの「L恐怖症」(1949.10)である。泰淳は作品で魯迅の重層的な歴史観(歴史の肉体性、現在進行性、重複性、見ると見られるという権力構図)を執拗に分析する一方、「文学者でなくなることを明るみに出」させる魯迅の威圧を語っている。このような泰淳の魯迅への恐怖をふまえた時、作品の最後のセリフ「君は自分が魯迅にでもなったつもりか」は、当時、文学者としての泰淳を冷視していた竹内に対するものであったのではないだろうか。

当時、中国文学者から小説家への転身、及び出処進退における自分勝手な行動が原因で、泰淳と竹内は冷却期間にあった。竹内は、武田泰淳が北海道大学の教職を半年ばかりで(1947.10～1948.5)辞職した事に対して、「当時、私は本気で武田を許せないと思い、しばらく友情の冷却期間がつづいた」¹¹⁾と言う。泰淳の最初の小説集『才子佳人』が刊行された時(1947.11)、竹内がそれに対して一顧だにしなかった様子を中国文学研究会の仲間は回顧している。¹²⁾二人の間にあったこの緊張感は泰淳の最初の長篇小説『風媒花』(1952年)において詳しく描かれるが、泰淳はこの作品においても、竹内を意識しつつ魯迅への畏怖を語っていたと言えよう。¹³⁾

「小田嶽夫『魯迅伝』」(1941.6)の文末で泰淳は語っている。「この魯迅という人間の住んでいた『支那』というものが、次第に巨大な影のようにたちはだかってきて、……やがて重量をまして全身を押しつけて来るのをおぼえた。そしてその重量は、僕等の上にくだされた宿命のような重量のような気がした。一生のがれられない重量なのであろう。……魯迅を思い出させられて『支那』の重量を感じるのは、僕等の宿命かもしれない」。中国文学者であった泰淳にとって、対決せねばならぬ相手は魯迅ばかりか、魯迅の背後にある「中国」でもあった。魯迅との対決は中国との対決であった。

このテーマは「中国人と日本文芸」(1943.9)と「中国の小説と日本の小説」(1950.10)において語られている。前者において、泰淳は日本文芸に対する魯迅の「不気味な沈黙」の原因を分析し、「かつては先進国日本の文芸に魅力をそえた現実の幕、感情の膜が、ようやくして魯迅と日本文芸の間をさえぎりはじめたのであろう」と嘆く。戦後の「中国の小説と日本の小説」で、泰淳は漱石と魯迅を比較しつつ、日中国文学者の「創作心理の底流」の距離を文学的表現によって解説し、「阿Qの現実をはなれてヴァレリイ的知性に飛躍するチャンスは何人にもあたえられていなかった」と繰り返し述べている。

つまり泰淳にとって、魯迅における「政治と文学」の矛盾統一は「阿Q的現実」という「旧中国」の存在を抜きにしては成り立たないものであった。彼が魯迅に「こんなに恋い惚れる」のは魯迅が「自分が立っている土地と、自分を支えている大衆と、その厚みみたいなものなかで思考していた」からほかならない。¹⁴⁾中国の現実との過酷な戦いにおいて魯迅を見るという観点について、泰淳と竹内の考え方は一致している。¹⁵⁾先行研究では、泰淳における中国とは戦場あるいは敗戦前後の中国(上海)であるという指摘があるが、泰淳は「青黒く深い潭のよう」な心を持つ「土民」の中国という「現実」¹⁶⁾に注目していたのであり、彼の魯迅

観もそれを視野に入れねばならない。

以上のように、魯迅を「政治と文学の矛盾統一」と「阿Q的現実」からとらえる点において、泰淳と竹内は共通している。しかし作品の読解において、両者の魯迅観は大いに異なるものであった。

『魯迅選集』の宣伝の一環として1956年に行った両者の対談「薇を喰わない」において、竹内は「傷逝」を「おれはあの作品は解釈ができぬ」と述べたが、泰淳は「大成功の作品」であると「傷逝」論を語る。また『故事新編』について、竹内が「非攻」「鑄劍」と「理水」以外は「概してつまらんね」と言うと泰淳が「ぼくはおもしろいな。読み返すたびに発見する」と異議を唱え、『故事新編』八篇はね、ほんとうに真面目に、この世のなかにおいてよいことを(知的に)実行する人間が感じた困惑を全部表現しています。……実に驚くべき宝の庫だと思う」と絶賛する。

泰淳の「大論」を聞いた竹内は、自分は「魯迅は小説が拙い、しかし文学者としては偉い、という図式にいくらかもたれかかっている」と反省するほどだった。作品理解に見える両者の差異は二人の対照的な資質を浮かびあがらせていると言えよう。

泰淳の最もまとまった魯迅論である「魯迅とロマンティズム」(1953.12)は思想論と作品論の二部から構成されている。彼はまず魯迅文学に一貫した暗さについて、それは「民族的暗さとでも言うべきもの」と指摘する。後半、彼は主に『故事新編』や「阿Q正伝」の分析を通じて、魯迅文学に常に現れる「魯迅個人のもの憂さ、かなしみ、怒りが溶けこましてある」革命家、阿Q、女媧、禹、「鑄劍」における黒色の義士とその周辺の人々の対比に注目する。泰淳はこの対比を魯迅の暗さの根源とみなし、周辺の現実を直感する現実感覚によるものと述べる。「創造社」をはじめとする若い革命文学派と違い、彼のロマンティズムは暗い「現実」を「灼きつらぬこうとした暗い試みであった」と泰淳は締めくくる。

泰淳はまた、「この世は喫人の世界である」「人間は孤独なる者である」が魯迅文学の主要なモチーフであり、それは魯迅と周囲の人々との対比と関係していると述べる。この分析は藤井省三氏による「狂人日記」に関する分析と通じている。藤井氏は魯迅が「狂人日記」に於いて「食人の関係性によって」「中国における人間の関係性」、つまり「人と人との連帯がその根底において全く否定された」「孤独」の状況を象徴的に描き出しており、その一方、「食人という民族の『罪』」を個が共有することにより、孤独において民衆と連帯しようと試み、「アンドレーエフ的な閉塞から自我を救い出し、状況に向かって自我を開放したのであった」と論じている。¹⁷⁾つまり魯迅は「食人(喫人)」という極限的な関係によって個と民衆とが断絶する状況、そして負の連帯の可能性——「人々と孤独において連帯している」——を語っていると見えよう。

魯迅とその周辺の人々との対比に焦点を当て、「人間は孤独なる者である」を魯迅文学の主要なモチーフと判断した泰淳は、自分の創作実践において、魯迅の「孤独」観と対話していった。以降、その対話を作品の分析に従って具体的に検討したい。

中国で文化大革命が始まった翌年、泰淳は『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』(1967.4～1968.3、以下『秋風』と略す)を執筆した。¹⁸⁾ 堀田善衛はこの書を泰淳の魯迅論と見なし、「私に魯迅存在というものの凄愴をより一層に、ほとんど斬りつけられたようにして感じさせたもの」と評している。¹⁹⁾ 泰淳自身、この作品を「辛亥革命の行動者たちの角度から、魯迅の内奥へ突きすすもうとする企て」(『魯迅と秋瑾』1968.6)の始まりであったと位置付けている。

まず、泰淳が対談で述べた魯迅と秋瑾の相違点から魯迅の革命観を鳥瞰したい。

秋瑾と魯迅の対比について、堀田善衛との対談で泰淳は秋瑾の死についてこのように語る。「魯迅のほうがよく見ていたわけですよ。革命が裏切られるということは、魯迅のほうがよくわかってたわけですね。……革命に対して、つねに懐疑的というか、先を見ていた、ということなんだな。……二人はまったく違ってたわけで……」。²⁰⁾ また、竹内も参加した対談で、泰淳は、魯迅は「ニヒリズムといえるほどの現実主義」から「革命へ入っていった」、魯迅さんのほうは最初から革命を称する人に対する、ニヒリスティックな冷たい眼がありますね」と魯迅の醒めた革命観を分析する。²¹⁾

また、泰淳は革命における人間の矛盾に直面する魯迅を語っている。「革命は、いかなる理想的な革命であろうとも、人間のしでかす『騒動』であるからには、滑稽(こっけい)な矛盾、いたましい矛盾なしにすまされるはずがない」、「魯迅は決して」「これらの矛盾を見ずにはしなかった」。(『魯迅死後30年に思う』1966.10)「かがやかしい中華民国の誕生の最中に」魯迅は「弱者中の弱者」である阿Qに、「苦渋と熱涙に顔をしかめながら、致し方なく登場させ」、魯迅の冷眼は、「本来肯定的なるべき人間の生活に、ますます多く否定的な面を発見し、あさましきものはあさましとして記録しないではおこなかった」と泰淳は見つめている。(『中国文学と人間学』1948.4)

1950年代、泰淳の中国文学論には、革命から除外された阿Qがよく登場する。²²⁾ 彼は阿Qを「非近代的」「徹底した患者」として捉える一方、阿Qに対する魯迅の共感に注目し、変革しなければならない「阿Q的現実」と対決する魯迅像を描いている。やがて60年代に入ると——とりわけ中国の文化大革命が勃発して以降は、泰淳の中国言説において、女性革命者秋瑾の存在感が大きくなっていった。「中国革命の源流に生きた人物」²³⁾であった秋瑾が強い行動者とすれば、その対極にいる阿Qは革命に「無視された、無知な弱者にすぎなかった」²⁴⁾だろう。しかし泰淳の理解における魯迅は、秋瑾と阿Qのむち(無智・無知)を問い詰めながら彼らの孤独を感知しようと努め、彼らの孤独を自分の孤独として噛みしめながら革命を見つめる文学者であった。

以上、「政治と文学」の矛盾統一、魯迅に対する畏怖、「中国」という魯迅の背後の影、泰淳と竹内の魯迅観の相違、方法としての「孤独」、魯迅と革命という六つの点から泰淳の魯迅観を整理してきた。まとめてみれば次のように言えよう。魯迅は「政治と文学」の矛盾統一を示す文学者だけではなく、優れた小説家でもある。魯迅は暗い。彼は革命の挫折を見てしまった人間である。故に、より一層冷徹な目で中国の食人的な現実面に直面し、阿Qをはじめとする軽

蔑された無知な弱者に温かく、反対に自分も含めインテリに徹底的に厳しい。そんな魯迅は孤独である。しかし文学者である以上、彼は孤独の中で周辺の人々を見つめている。東アジアの知識人にとって、魯迅は避けられない恐ろしい存在である。

こうした泰淳の魯迅観は時代によって面貌を変えるものの、泰淳にとって魯迅は一貫して重要な思想的資源であった。

二、泰淳の「声なき男」と魯迅の「孤独者」

それでは泰淳は魯迅と対話しながらどのような創作を行ったのか。「魯迅とロマンティズム」(1953.12)が発表された翌年7月に世に送った「声なき男」は、魯迅文学の主要なモチーフとした人間の孤独性に対する泰淳の思考と思われる。

竹内実は、泰淳の小説に「一度それ(中国——筆者注)を消してフィクションとして書かれているものが」と述べ、「『声なき男』という作品は魯迅の『孤独者』を念頭において読むと非常によくわかります」と例を挙げている。²⁵⁾ また、尾上兼英はこの作品と魯迅の小説「孤独者」(1925.10)との影響関係・近似性を指摘し、「手法は異なっているが、これは魯迅の『孤独者』と同じテーマを追求していることである。各場面に登場する主人公の行動が、外から内面の孤独を浮彫りにし、手紙で内面の苦悩をめぐり出すのも同様である(魯迅は対話による告白と手紙の両方を使っている)。／魚津(「声なき男」の主人公——筆者注)の手紙は魏連受と似た青春の挫折を訴える」²⁶⁾と述べる。

尾上が言う「同じテーマ」とは、「自分の心とじかにふれる味方を見出し得ない『孤独者』」、「青春の挫折による内面の孤独」である。但し泰淳自身の「孤独者」論と孤独観の中身については言及していない。

(一) 泰淳の「孤独者」論と竹内の訳

泰淳は「阿Q正伝」、『故事新編』と同じく、魯迅論において「孤独者」をよく取り上げている。例えば「小田嶽夫『魯迅伝』」(1941.6)では、寝棺の中に横わっていた魏連受が「口もとにさながら氷のよう冷たい微笑を浮べて」という「魯迅自身を物語る言葉」に「おそろしい気がする」と綴る。「魯迅死後30年に思う」(1966.10)では、魯迅と孤独者たちの連帯を強調する。「この短編の主人公は、なすすべもなく孤独に寝棺の中に横たわるのであるが、さびしく息をひきとるのは、この作品の主人公ばかりではない。魯迅は数限りない孤独者をながめ、その最後を見とどけねばならなかった。」また、「中国文学と人間学」(1948.4)において、泰淳は魏連受のうめき声を次のように述べる。

(魯迅は人間のエゴイズムに悩まれ——筆者注) 人間がかくも醜悪であることは悲しい。

しかもこの悲しむべき事実を逃避することは許されない。彼の短編『孤独者』の中で、一友

人はその母の死のあとで、狼の吠えるような物かなしげなうめき声をあげて泣く。その友人の死のあとで、魯迅もまた、それと同じ訴える如く、泣くが如きうめき声を発するのである。それは家族、村民、同僚、知人、あらゆる人間にとりかこまれながら、なおヒシヒシと迫る孤独の念から発した。この思わずもれたうめき声の中に、彼の凄然たる人間観の内容は表現されている。……自己の全存在をかけた、自己の血肉をわけた人間観であった。

「孤独者」の分析において、泰淳は群衆の中の魯迅の壮絶な孤独に感銘する一方、周囲の孤独者との連帯感を強調している。

1953年4月、竹内の最初の魯迅訳『魯迅作品集』が刊行された。泰淳は書評で竹内の翻訳を次のように賞賛している。「(魯迅の文章は——筆者注)「怒りと苦しみを噴き出しながら、表現の形式はかなり複雑である。……(竹内好の訳について——筆者注)同じ小説でも『阿Q』と『孤独者』の容易ならぬちがいが、微細な点まで残りなく伝え移されている。」²⁷⁾

魯迅の原作で最も強烈な印象を残す狼の叫び声について、泰淳が評価した竹内の翻訳は以下のとおりである。

魯迅の原文：

「像一匹受伤的狼，当深夜在旷野中嗥叫，惨伤里夹杂着愤怒和悲哀。」

竹内好の訳：

A「手傷を負った狼が深夜の曠野に吠え狂うように、痛惨のうちに怒りと悲しみをまじえた声であった。」

B「手傷を負った狼が深夜の曠野に泣き叫ぶように、痛惨のうちに怒りと悲しみをまじえた声であった。」

原文の「当深夜在旷野中」を竹内は時間の「深夜」と場所の「旷野」を一緒にして「深夜の曠野」と訳している。それに対して、1932年7月の佐藤春夫の訳は忠実に中国語の原文に従って「真夜中に広野の中で」となっている。

ところで、このような翻訳の工夫に注目した泰淳が、翌年発表した小説「声なき男」には、似たような表現が現れる。「虎か狼が深夜の虚空にむかって吠えるごとく、魚津が吠えた」。これは表現だけでなく内容も「孤独者」を意識した形跡がある。故に、泰淳は執筆の際、竹内の訳文を念頭においたのであろう。

(二) 青春の挫折：「謝氷瑩事件」と「声なき男」

以上の考察によって、「声なき男」が魯迅の「孤独者」及び竹内の訳文から影響を受けた可能性は高いと思われる。但し、「声なき男」は魯迅の小説には語られない国家権力による暴力——理不尽な検挙と拘留という「青春の挫折」が描かれている。この内容は泰淳自身の留置体験によると思われるので、その留置の原因となった中国人女性作家について考察してみたい。

泰淳は「中国文学研究会をはじめから、日本留学の中国人学生とつきあうようにな」った

が²⁸⁾、特に印象に残るのは謝氷瑩という中国人女性作家である。彼女は嘗て北伐軍に女兵として参加し、1934年の秋二回目に来日していた。泰淳は彼女に下宿を斡旋するなど交友関係にあったことから、1935年4月14日、偽満州国皇帝溥儀の来日頃、暗殺計画の嫌疑で検挙され、日黒警察署に45日間勾留され²⁹⁾、一方、謝氷瑩夫婦も20日間ほど拘束された。泰淳はこの事件を最後に左翼運動から離れていった。

この謝氷瑩に対して、作家として評価した竹内と異なり、泰淳は「明らかな男性優位の視点で」「『女』という被写体としてしか」見ていないと分析する論者がいる。³⁰⁾ 確かに泰淳は「女」としての謝氷瑩に興味を抱いていたようであるが、「泰淳が心底から氷瑩に対して、負の感情を持ち続けていた」³¹⁾ かどうかは疑問に残る。なぜならば、泰淳は謝氷瑩を語り続けるからである。管見の限り、泰淳の謝氷瑩に関する作品・対談には以下九篇がある。

- ①「月明、笛と風が聞こえる」(戯曲、1935、36年と思われる)³²⁾
- ②「謝氷瑩女士従軍」(『揚子江文学風土記』小田嶽夫と共著 龍吟社 1941.12)
- ③「謝氷瑩事件」(『中国文学』1947.11)
- ④「作家に聴く・武田泰淳」(『文学』1952.10)
- ⑤『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』(『展望』1967.4～9、1968.3)
- ⑥「わが思索わが風土」(『朝日新聞』1968.3.15～19)
- ⑦「禁欲の青春」(『小説現代』1968.7)
- ⑧「中国人と日本人」(『サンデー毎日』1971.5.9)
- ⑨『対話 私はまだ中国を語らない』(泰淳・堀田善衛対談 1973.3)

これらの文章には、「謝」という「無邪気」で「リーハイ」³³⁾ な中国人女性が生き生きと描かれており、この女性に対する強い関心が認められる。但し、これらの記述には「謝氷瑩事件」がよく思い出され、泰淳は「謝」を語るにより事件を反芻し続けたと言えよう。それほどに謝氷瑩事件は泰淳の人間観・人生観に影響を与えていると思われる。

謝氷瑩事件は泰淳の五回目の留置場体験である。五回ほどの留置体験で、泰淳は犯人同士の付き合いを通じて、「安全を保証されていた」、「生活には困らない」自分が「生きることのむずかしさを知っている」民衆を批判する資格など、「ありはしない」と反省したり³⁴⁾、「赤い坊さん」という自分の存在とは、「滑稽で非合理的なものだった」と恥ずかしく思ったりする³⁵⁾。だが、謝氷瑩事件が泰淳の記憶にまつわりついている理由はこれら「愉快で危険な」犯人たちより³⁶⁾、特高を相手にする理不尽な検問体験にあるだろう。その思いは主に③(40年代)、④(50年代)、⑥(60年代)という三つの作品の中でしみじみ語られている。少し長いですが、まず該当の部分引用しよう。

③「謝氷瑩事件」(1947)

文章の冒頭「謝氷瑩女士の事件は、二十四歳の私にかなりの影響をあたえた。私はその事件以来、すこぶる用心ぶかくもなり、如何なる行為をなす場合にも、いちおう疑ってからとりか

かるようになった。」

「そんな路(左翼運動のこと——筆者注)はあきらめ、子供らしい善意だけで留学生たちとだらしなく遊び暮らしていた私は、こんな目にあうと、以前のような反抗心も起きず、ただ馬鹿馬鹿しく厭世的、厭人的となるばかりだった。……暗い、みじめな、まるで冷たい穴の中へでも沈んで行くような気がした。こんなにおとなしく、こんなに消極的に暮らしていても疑ぐられるのかと思うと、研究会をやっていた明るい希望も、留学生たちとつきあう楽しさも、それら甘い夢のような日常が破碎され、いきなり意地悪い現実の壁に鼻先をねじりつけられた感じだった。」

(尋問の時、特高は)「人間の価値を全然認めていない例の口調で尋問した。……私が真実のみを語るのに、彼等はすこしも信用せず、私を嘘つきと罵った。白状したくても白状することがないのだ。……私は言うに言わぬ絶望を感じた。人が真実を語っても一向に相手に通ぜぬ恐怖で私は極度に惑乱して、着物の胸をひろげて、ピタピタ自分でそこを叩いた。」

(文章の最後)「私自身は、人間の行為なり、思想なり、常に誤解されるものである、それを他人に正しく理解させるためには、いつも自分がある程度、表現し、明確ならしめる必要がある、という人生哲学を得たのであった。ただし表現し、明確ならしむべき自分そのものが、不安定なため、疑ぐられたり、怒られたりは、その後もつづいた。」

④「作家に聴く・武田泰淳」(1952)

(例の事件を述べた後)「いつの間にか、僕には、権力の中で生きてゆくためには、疑い深くしていなければなれば、生きられない、というような信念ができて上がっていたのだ。」

(1931年5月の最初の検挙以来、三年続いて毎年必ず拘留されたことについて)「別に調べられるわけでもなく、全くわからないのだが……それから考えたのは、つまり人間というものは、お互いに自分を、他人にわからせることは、ほとんどできない、ということだった。……人間というものは、本来疑われるものだ、決して相手を信じられるものではない、ということを非常に強く考えるようになり、勢い極度に用心深く生きるようになった。その点は、今の僕にもまだ残っている。」

⑥「わが思索わが風土」(1968)

「四十日ほど留置されても、私には白状するタネがなかった。それ以来、私は『人間とは疑ぐられる動物である』という原理を骨身にしみた。冒険などできる、男らしい男で私はなかった。……『こういう人間です』と、自己証明する国内パスポートが私の内心にない。私は、ほかの誰よりも私自身を疑っている。信用しない。」

以上、謝氷瑩事件によって泰淳が「骨身にしみ」て感じさせられたことは、次のような点ではないだろうか。

- ①人間というものは疑われるものだ、常に誤解される。
- ②従って、他人に正しく理解させるためには、自分を明確に表現する必要がある。
- ③しかし、この意志疎通のプロセスはなかなかうまく行かない。理由は双方にある：
 - A 自己そのものが不安定、信用できない。まず自分自身を疑っている。
 - B 相手は理解しようという姿勢がない上に、「人間の価値」さえ認めてくれない。
- ④故に、生きて行くために、利口に用心深くならなければならない。³⁷⁾

1954年8月に発表された「私の創作体験」³⁸⁾で、泰淳は何度も自分の小説が「体験と密着している」ことを強調しており、「声なき男」はその前月発表されている。ここでは、謝氷瑩事件と作品「声なき男」の関係から、作品の「内奥」を検討したい。

主人公の魚津は陰気な三十男である。彼は寡黙で声が異常に低いので、勤め先の民間放送局で「耳」というあだ名で呼ばれている。あだ名の由来は、強い人間不信による寡黙さにあるが、その原因は戦中の国家権力による理不尽な検挙と拘留にあった。以下は手紙からの引用である。

私には何一つ白状すべき事実がない……刑事にとっては、私という一個の人間は、そこから犯罪をひきずりだす生物にすぎなかった。……私は人間が喋るか黙るかどっちか一つをせずにいられないことを、実に恐ろしいと感じた。私がいくら真実を喋っても、彼にはそれが嘘ときこえる。……私と刑事の関係といえば、……彼の絶対的な声と、それを厭でもうけとめなければならぬ私の耳とのつながりにすぎないのだ。もっとつづめて言ってしまうと、刑事とは「声」であり、私とは「耳」なのだ。

魚津は「他人にはたらきかける力がない。いつも何かされるのを待ちうけるだけだ」という。この「自分が無力だ」という魚津の自己認識は、泰淳の「冒険などできる、男らしい男で私はなかった」という自己認識に通ずるものがある。³⁹⁾ また、魚津は録音取材の際、「無害安全な耳」の「はたらきのおかげで」人(白人専門のパンパン——筆者注)に「許すべからざる傷をあたえたてしまった」ため、手紙で「他人の声ばかりではない、自分の声も同様に、警戒すべき危険物なのだ」(加点は原文)と自分に対する不信・不安を強調する。この実存的な不信・不安は泰淳が謝氷瑩事件によって「骨身にしみ」て感じさせられたことでもある。

「耳となる自由も実はこのさされていない」魚津はついに自分の生きる道を全て失い、その悲憤の気持ちか「人類の叫び」とは思われぬ呻き声に化して暗い世間に告発したのだ。泰淳は「謝氷瑩事件」で「極度に惑乱して、着物の胸をひろげて、ピタピタ自分でそこを叩いた」と書いてだけで、呻き声こそ描写しなかった。だが、自伝的要素が入っている長篇小説『快樂』では、泰淳を彷彿とさせる主人公、大寺の坊ちゃんである柳は取調室で白状することがないため、「言葉にならぬ言葉が、彼の口から、胃の中の臭い不消化物でも吐き出すように、吐き出

された。」⁴⁰⁾「声なき」と「言葉にならぬ言葉」の絶叫は対極のように見えるが、いずれも自己表現の不能を表す寓話的な設定である。

以上の分析によって、「声なき男」である魚津の悲劇的な運命は、泰淳の謝水瑩事件による留置体験との関連性を見出すことができる。

(三) 孤独観の相違：「声なき男」と「孤独者」

魚津は戦中の検挙体験によって「耳」になった。この人間を異化させる絶望的な生き方は戦後社会でも行き詰まる。その時魚津の口から出た抑えきれない叫びは絶望の虚妄の告発と言えるだろう。注目したいのは、魚津は番組の成功を祝う同僚に囲まれた宴会で、叫び出すことである。泰淳は、魚津と職場の同僚との断絶を描き出す。同僚は魚津の異常な顔色を「判断でき」ず、魚津が倒れると「一同は迷った」。その断絶は、魚津の叫びの不可解さを強調する描写によってより一層伝わってくる。「その声は、意識したら誰にも出せない種類の、身ぶるいするような声」、「何かしら不可解なかたまりが噴火する音響だった。あれほど常に聴きとりにくい、小声でしか喋れなかった小男に、これほどの声量があるうとは三人とも意外だった」、「これが人類の叫びかな」。群衆に囲まれながら孤独の念から逃れられない宿命の悲鳴を、このうめき声の中に聞く事ができる。

ところで魯迅の「孤独者」では、魏連受は大人しく祖母の伝統的な葬儀に立ち会い、大勢の親戚に囲まれた中で「不意に、彼の眼から涙がはらりと落ち、つづいて声ももれたかと思うと、たちまちそれは慟哭に変わった。傷ついた狼が、深夜曠野に吼えるのにも似て、痛苦のうちに憤りと悲しみをまじえた声であった。」⁴¹⁾ この一節について丸山昇はこのように分析する。「この挿話は、青年時代の理想が敗れた一知識人の挫折感が、周囲のしきたりや愚劣な人間関係に自らを沈み込ませることで自分を破滅させ、それによって逆に自分をとりまく世界との関係を拒否して、自分を『孤独者』として完成させるという、全体の主題の鮮やかな伏線として使われているのである」。⁴²⁾

魏連受は親戚と村民に「変人」と言われ、「わしらとまるきりちがうんで」と外国人扱いされた。愛する祖母とも「だんだん離れていった」、子供に絶望し、語り手の「私」に対しても「私たちは、結局道がちがうんだらうと思う。そうだったら、どうか僕を忘れてくれたまえ」と分かれを告げる。

「声なき男」の魚津と同様、魏連受もまた一人取り残される。彼らは周囲の世界との徹底的に断絶しているのである。「声なき男」の最後の場面で、民間放送局社会課の課長は透視術で魚津を見る。見えたのは「黒いもの」、「ものすごく黒いもの」である。「孤独者」の魏連受に対し、魯迅はよく「黒気」という独特な表現によって彼の顔が醸し出す雰囲気を描写しており、「黒いもの」と「黒気」が断絶者の身に淀んだ不安と怒りの象徴と思われる。

「声なき男」の魚津は声が非常に低いばかりか、言動も音を立てない不気味な存在である。一方、「孤独者」では、「黙々」「沈黙」といった描写が多く、魏連受も寡黙な人物という印象

を与える。⁴³⁾

小説末尾で「耳の奥で身もだえしてい」て、「ついに外に出た」手傷を負った狼が深夜の曠野に向かって吠える声を、泰淳は、それを魯迅が発するうめき声と解釈している。⁴⁴⁾しかし、それは実際、幻聴ではないだろうか。「声なき男」と同年に発表された短篇小説「動物」⁴⁵⁾は、「寓話の形で現象を取り出してみる」⁴⁶⁾という意味で「声なき男」と近い作品であるが、最後の場面において、主人公の耳の底に「熊の咆哮が、遠くから聴こえてきます。遠く彼の心のひだの奥の奥の方から、外側に附着した二つの耳の孔の方へ、どよめいてくる」と書かれている。この幻聴は、歴史学者の主人公が自分の策略に乗らない存在に対するぼんやりした不安を象徴している。1952年7月に発表された「幻聴」という題名の小説において、無口の好人物である主人公棄三は、幻聴のため工場監督の陸軍少尉をなぐるが、それが原因で少尉が聴覚を失う。戦後、少尉の妹は嘘の幻聴を用いて棄三に復讐した。そのため精神的に不安定な状態に陥った「棄三は自室にとじこもった……幻聴の悲鳴が消える日、それはおそらく彼が餓死する日であろうか」という文章で小説は終わっている。

「声なき男」、「動物」、「幻聴」は、沈黙、幻聴、狂気の手法を用いて心理的な不安と恐怖を表象し、孤独な内面世界を実体化にしたと言えよう。これはロシア作家アンドレーエフの作品「嘘」と「沈黙」に現れる印象主義と写実主義を止揚した象徴主義を思い出させる。魯迅は「狂人日記」(1918)において「ようやくアンドレーエフの手法を換骨奪胎し、狂人の妄想を借りて孤独を食人としてさらに実体化することにより、自己閉塞を突き抜けて状況と共生する新たなる自我を形成し得たのである」と藤井省三は論じる。⁴⁷⁾魯迅の思索の原点「人間の現実との深い確執」によって⁴⁸⁾、「孤独者」の魏連受は孤独ではあるが、小説においては語り手「私」によって「形」と「影」の決別の劇⁴⁹⁾が描かれ、最後「私の心がほっと軽くなった。私は濡れた石畳の上を、月光を浴びながら、心静かに歩いていた」と描かれているように「ある種のカタルシス」⁵⁰⁾が見える。このようなカタルシスは泰淳には無い。周囲の世界との断絶を描くものの、魯迅と泰淳は違う結末を構想する。それは二人の孤独観の相違に繋がると考えられる。

「謝氷瑩事件」をきっかけに、泰淳が抱いた人間に対する不信・不安、及び人間同士の意思疎通に対する絶望・危惧が、「声なき男」のテーマとなったと言えよう。この作品では、「被害者」であった魚津が加害者にもなる可能性も示している。彼の絶望の叫びも周りの人を「威圧し」、「胸をえぐる、暴力的なところがあった」。ここで泰淳が問い詰めるのは人間という存在の安定性と信用であり、この問題は人間同士の意思疎通の前提でもある。1952年10月のインタビュー「作家に聴く・武田泰淳」で、泰淳は「人間は、どうにも変えられるものだということも、感じていた」と人間の不安定に因む人間の危険性を指摘する。

この「人間不信」の諦念は、泰淳が「人間の真実のぎりぎりのところ」⁵¹⁾がためされた中国での戦地体験を通して得、彼の人間観の原点となったと思われる。「戦地の二年間、学校生活では得られない人間観をまなんだ。時と場合で、人間は何をやらかすかわからないこと。善

人も悪をなしうること。」(「わが思索わが風土」1968)「文学と私」⁵²⁾に於いて、彼は自分にとって「永久に忘れられない」戦地経験を語り、「それは国家的犯罪ともいえるでしょうけれども、それは私個人の罪であって、しかも、しかも罪があるときは意識しないぐらいに無神経になって生きて行くわけですから」、「ぼくは人間というものは、自分では意識しないけれども、地球上にある殺人といえますか、人殺しと関係がないといえないと思うんです」と述べている。

「孤独者」の表現と手法の影響が認められる「声なき男」という作品では、泰淳は寓話の形を用いて、人間そのものへの懐疑とそれに因む人間の孤独たる宿命を描く。それは人間の本性なのでこの小説は救いを提示しない。

カタルシスで小説が終わる「孤独者」においては、泰淳とは異なる魯迅の孤独観が現われている。丸尾常喜は魯迅の散文詩「影の告別」(1924.9)に見える魯迅の『彷徨』『野草』期(1924~1926年)の思想を「決別の劇」という名称と呼ぶ。「一方に『暗黒と虚無だけが実在である』という思想にとりつかれ、『歩く』ことをやめて、自分につきまとう激しく陰暗な衝動に身を委ねようとする魯迅があり、他方にはそれ故にこそそれに向かって『絶望的な抗戦』をする魯迅がおり、両者が彼の内面でたたかっていることを示している。」丸尾氏によると、魯迅における「決別の劇」は最終的には小説「孤独者」に結晶するという。⁵³⁾

周囲の世界との断絶を感じる魯迅は内面の戦いを通して、「暗黒」に身を没するという「影」の役を魏連受に当て、「形」である語り手の「私」が「暗黒」から脱して孤独を耐えながら歩き続けるという「絶望的な抗戦」の決意を暗示する。これは内面の分裂(「形」と「影」)によって、「狂人日記」に提示される「個」が民衆と孤独において連帯するという負の連帯による自我救済の方法を、発展させた孤独観と言えよう。

従って、泰淳は人間不信という実存的な諦念から周囲世界との断絶に辿り着くのに対し、魯迅は中国の阿Q的現実に根ざして孤独な叫びを發する。だが、泰淳が「魯迅とロマンティズム」(1953.12)で指摘するように、魯迅は「文学者である以上」、周辺の現実を同時に見つめなければならない。そのため、魯迅は内面の自己滅亡の衝動を克服して孤独な「絶望的な抗戦」を続けた。泰淳は魯迅の苦闘を理解したに違いないが、人間不信の諦観から「爬虫類」的な自己韜晦の生き方を選んだ。従って、生涯「L恐怖症」に罹ったと言えよう。

三、『秋風秋雨人を愁殺す』における魯迅

(一) 声をあげる女

先述したように、小説「声なき男」には、魚津が閉塞的な世界を抜け出す力は提示されていない。だが実際、この小説の下敷きと思われる作品「謝氷瑩事件」のもう一人の主人公謝氷瑩は、女性の独立心と反抗心に満ちた叫び声によって突破口を示している。それは魯迅の現実を見つめる態度と共通しており、また泰淳が執拗にこの事件を語り続けた深い原因の一つでもあるのではないか。「謝氷瑩事件」という文章には、彼女の反抗心を生き生きと描く一幕がある。

(拘留中の話し——筆者注) ある日、スリで入っている二十歳ばかりの男が、便所の帰りに女士の房の前に立ち、着物のスソをまくって醜物をあらわして女士をからかった事があった。すると女士はたちまち大声を發して、非常な勢いで相手を罵った。その罵り方がいかにも自然で、絶対的で、聴いている私まで、精氣と勇氣が湧き上がってくるのをおぼえた。独立し、反抗することに慣れている中国女性の怒りにみちた罵言は、ああした醜惡な、濁り澱んだ空氣の中では、ことに清風にも似て効果的であった。

この「独立し、反抗することに慣れている」中国女性と対照的な存在は泰淳自身である。「ぼくには……独立心や反抗心が、ほとんどない」「決して冒険を好む(或いは、できる)人間ではない」と泰淳は自分の性格を語る。⁵⁴⁾ 謝の「無邪氣」、「あまり計画も使わない」、「のんき」なところに閉口するが、彼女の反抗心にみちた「自然で、絶対的」な罵言を、「声なき男」の性格の一面を持つ泰淳は、よどんだ空氣の中に吹き込まれた清風を覚える。「才子佳人」(1946)、「女賊の哲学」(1948)、『十三妹』(1965)、「王者と異族の美姫たち」(1967)といった行動力が溢れる「リーハイ」の異国(中国人)女性を描く歴史題材の作品に比べ、実際に見聞した謝氷瑩の「野蛮な強さ」は一層説得力をもって描かれている。

この中国女傑の系譜で、泰淳に「罵言」を浴びせるもう一人の人物は、魯迅と関係があった革命家・秋瑾である。彼女は日本留学中、清国留学生取締規則に反対する運動をおこし、賛同の意を表さない留学生に対して短刀を突きつけて死刑を宣告したが、魯迅もその中に入っていたという。泰淳は『秋風』でこのエピソードを紹介してから、女性志士の罵声に感激してこのように述懐する。

もしも私が彼女をヒロインとする劇を書くとするれば、壇上で絶叫する女性志士と、その罵声を浴びて黙って坐っている医学志望の文学者の姿を、どうしても一場面くわえたいところである。

また、『秋風』のタイトル「秋風秋雨人を愁殺す」は、秋瑾が処刑される前に揮毫したという詩である。泰淳は戦争末期、上海に滞在した時、秋瑾劇を見るために何回も劇場に足を運んだ。「この芝居の幕切れが痛烈で、鎖を引きずり、赤い獄衣に黒髪を長くたらしめた秋瑾が、処刑を前にして『秋風秋雨愁殺人』と叫んだ声がいまだに耳に残っています」。(「人民間の文化交流」1969.5) 二十年以上の歳月が経ったにも拘らず、泰淳はこのセリフが忘れられなかった。上海時代の親友である堀田善衛は、二人で芝居を見に行った時、このセリフの前になると泰淳が「いまいまよ、いまいまよ」と言った、「そのことだけいまでもおぼえていますよ」と回想している。それに対し泰淳は「かならずいうんだ。有名なせりふだからね。いわんきや『秋瑾劇』にならない、客が満足しない」と言う。⁵⁵⁾

つまり泰淳にとって謝氷瑩と秋瑾は力強く「声」を存分にあげる人物であった。「うまれか

わり物語」という小説でも、声を上げる中国人女性は強烈なインパクトを読者に訴える。⁵⁶⁾ また、彼が敗戦後まもなく上海で翻訳した中国作家の短篇小説「叫び」(沙汀、1945.12)では、主人公が四川省の山村で農業を営んでいる女性で、彼女もやはり「抹殺できなかった」さけびの持ち主である。⁵⁷⁾ 泰淳の作品では「『女性』と『中国』という二つの他者は、自己の相対化し、脱中心化を果たす上で重要な存在とされた」⁵⁸⁾ に止まらず、両者が常に重なって考えられることこそが泰淳の独自性だと思う。泰淳は戦後初期の評論「滅亡について」において、「中国は数回の離縁、数回の奸淫によって、複雑な成熟した情欲を育まれた女体のように見える」と、中国人女性の肉体と中国を二重写しにし、滅亡の経験の欠けた日本と異なった中国の強靭さを指摘し、独特な滅亡観を展開している。⁵⁹⁾ 泰淳の中国人女性観は彼の中国観の形成に並々ならぬ影響を与えていると思われる。その一方、その中国観は彼の創作において、反抗心の強い行動者としての「声を上げる女」の登場となった。⁶⁰⁾ 力強い悲憤の叫び声は彼女たちの激しい気象のシンボルである。

(二)『秋風』に於ける魯迅

だが、泰淳が秋瑾の伝記を書いたのは、彼女の男勝りの性格に魅了されただけでなく、そこには魯迅の存在があったからである。兵藤正之助が指摘するように、「武田にとって秋瑾は、魯迅との関連によって興味をひき起こされた女性だった」。⁶¹⁾ 泰淳はこう述べる。「秋瑾にここをひかれるのは、ドラマの主人公としておもしろいのはもちろんですが、彼女が日本に留学したこともあり、魯迅や孫文、廖仲愷らとも関連して、中国革命の源流に生きた人物と見ることもできるからです」。⁶²⁾

執筆当時の1967、68年は文化大革命の最中であり、この新しい「革命」をどう見るべきか、それは泰淳が自分に課した課題であったと言えよう。三十年代文学の評価と絡んでいた魯迅評価についても、泰淳は深い関心を抱いている。このような思惑が込められた『秋風』は、『司馬遷』より広い領域で深い文学の思考で氏の中国に対する罪の意識、戦争責任論、人間論、革命論を描き切った佳品だといえることができる。⁶³⁾

作品は、文革中の中国訪問後に創作された第三章から、魯迅と秋瑾の対立に焦点をあて、魯迅の存在感も増している。第三章は、紹興紀行の形で秋瑾の故居と刑死の場所を紹介し、魯迅との共通点を強調して、忘れられつつある秋瑾を紹介する。第五章「落水狗と共に」の後半と第六章「猪の叫び響く」の主役は魯迅である。第五章の後半は魯迅の小説「薬」、「故郷」、「酒楼上にて」、「孤独者」やエッセイ「『フェアプレイ』は早すぎる」や小品「范愛農」などを自由自在に駆使し、グルグル「落水狗」という存在を転回して、失敗した知識人、盛り返した落水狗、文革中「落水狗」として批判されていた友人である夏衍、「落ちるまえに死せる犬」と自称する「私」といった人物たちが織り成す「相互注釈の世界」の中に、革命に対する複雑な思いを寄せる。終章の第六章では、「私」が秋瑾の霊前にむかい、彼女に「卑怯者」として死刑を宣告された魯迅のために、同志として認めてやってほしいと訴える。このことについて、

郭偉は、泰淳が「最晩年の魯迅を夏衍の視点から、青年つまり文学者以前の魯迅を秋瑾の視点から、そのように前後両側から『魯迅』を挟み撃ちにしようとする」と論じている。⁶⁴⁾

(三) 武田泰淳の孤独：愛する対象に裏切られる宿命を我慢する

「相互注釈の世界」である『秋風』において、魯迅が夏衍と秋瑾に挟み撃ちにされる一方、泰淳は「私」と秋瑾、魯迅との対話によって、中国と革命の問題を思考し続ける。その時、周囲の世界に取り囲まれる泰淳はいつも孤独を感じている。

中国側の接待者、案内者や通訳は「私がなぜ、秋瑾女士の処刑された場所を、それほど熱心にみたがっているか……なかなか理解できない様子だった。……いぶかしげな表情が、彼や彼女の顔に浮かんでいた。」泰淳一行のまわりにひしめいている紹興の子供や老人もそうである。彼らは「おそらく、なぜ日本人がこんな場所で写真をとりに来ているのか、ふしぎに思ったにちがいない。……もしも私が『僕は秋瑾女士の刑死の場所をたしかめたかったから、わざわざあなたがたの町へやってきたのですよ』と語りかけたところで無意味であろう。」接待役の中国側の作家胡万春に、泰淳はまた問いかける：「私がなぜ秋瑾にこんなに興味を持つのか、あなたにはわからないかもしれない……」秋瑾に対する思いが、秋瑾の故郷で理解されないことは、中国人との心のふれあいを望んでいた泰淳にとって、寂しいことであつたろう。「竹内好の孤独」(1959.11)で泰淳は、竹内が中国人の中で、また戦後の中日友好ブームの中で味わった孤独をこのように想像する：

一般の日本人の間で孤独であつた彼が、一般の中国人の間でより以上孤独であつたとしても当然な話ではあるが、中日友好を戦後になって急に騒ぎ出した文化人の多い中で、中日にまたがった彼の、徹底した孤独感は、空おそろしいようでもあり、異様に鮮明な印象を与えるものである。⁶⁵⁾

文化大革命の中で紹興にいた泰淳が感じた孤独は、中国人留学生の間や北京留学中の竹内の孤独⁶⁶⁾と重なっているのではないか。自分が理解すべき対象を冷徹な目で眺め続けながら裏切られ、絶望を味わされる宿命的な運命。このような「徹底した孤独感」は「革命が裏切られる」ことを理解していた魯迅のそれと相通する。泰淳は竹内の孤独を一つの方法として内面化し、日中社会の激動に対して思索を怠らない。秋瑾の霊前で魯迅を代弁する『秋風』最終章の終盤、そんな泰淳は秋瑾を諭すように「孤独」を語る。

ああ、死に至るまで孤独だつた鑑湖女侠よ。(革命家も文学者も、どんなに信頼すべき仲間にとりかこまれていても、孤独が本領なのだから今さら言うまでもないけれど)。

文革中、魯迅は盛んに祭り上げられた。だが魯迅の対立面とされる側に矛先を向けた批判運

動に泰淳は戸惑いを感じる。一方、嘗て魯迅を「ないがしろにした」秋瑾は自分の故郷で忘れられつつある。秋瑾、魯迅との対話によって中国の革命問題を問い続ける泰淳の思いは、日本だけではなく中国でさえ理解されない。このような世界に身を置いた泰淳は、魯迅から得た孤独の本領で対決するしかなかった。

終わりに

「人間は孤独なる者である」と魯迅文学の主要なモチーフを判断するように、泰淳は実存的な孤独観の持ち主である。人間そのものを信用しないから彼は人間同士意志疎通の不可能を諦念し、自己韜晦の生き方を選んだ。だが泰淳は「周辺の現実をも同時に見つめていなければならない」魯迅の文学者としての態度に畏敬する。そのため「声なき男」の対極にいる反抗心が溢れる「声を上げる女」に注目し続ける。しかし泰淳の中には「声を上げる女」である秋瑾に対立する魯迅がおり、「相互注釈の世界」でこの二人に迫る泰淳は革命家も文学者も「孤独が本領」という結論に辿り着く。

つまり、日本と中国の現実で孤独を味わった泰淳は、魯迅を思想的資源とすることにより、愛する対象に裏切られる宿命に耐える「絶望的な抗戦」という決心が培われたと思われる。「人間は孤独なる者である」という実存的なテーマを「革命家も文学者も孤独なる者である」と置き換えるなら、「孤独」を逆手にとって、実存的な孤独観と「絶望的な抗戦」を融合させる泰淳の魯迅受容の一面が浮かび上がって来るだろう。

注

- 1) 藤田省三 (1977年5月)「竹内好」雑誌『展望』(竹内好追悼)。
- 2) 竹内好 (1936年11月)「魯迅論」『中国文学月報』第20号。竹内好作品の引用は『竹内好全集』(1980~1982年 筑摩書房)に拠る。
竹内好 (1936年12月)「最近の中国文学」雑誌『文芸』。
竹内好 (1937年1月)「郁達夫覚書」『中国文学月報』第22号。
- 3) 武田泰淳 (1937年3月)「影を売った男」(『大魯迅全集月報(2)』)。林叢は「L恐怖症」(1949.9)を書いた泰淳が、当時の「近代文学」と「新日本文学」の間の「政治と文学」論争から、「中国の一九三〇前後の文壇の論争を連想し、政治と文学の問題、更に戦後文学の出発点をどこにおくべきか」という問題に対する解答を、魯迅に求めようとした」と論じる。(「武田泰淳と魯迅——『L恐怖症』を中心として——」『論究』27、1989.10)しかし、日本文壇における「政治と文学」論争はすでに戦前から始まり、政治とのかかわりを宿命とする文学観を泰淳は37年当時早くも確実に持っていると言えよう。泰淳作品の引用は『武田泰淳全集』(1978~1982年 増補版 筑摩書房)に拠る。
- 4) 武田泰淳 (1954年7月)「声なき男」『別冊文芸春秋』第41号。
- 5) 武田泰淳 (1967、68年)『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』は雑誌『展望』1967年4月号~9月号(6月号は休載)に連載され、翌年1月に終章が書き加えられ、3月に筑摩書房から上梓された。
- 6) 兵藤正之助の「武田泰淳と魯迅」(『武田泰淳論』冬樹社1978.5)を参考にした。

- 7) 竹内好 (1958年7月)「武田泰淳の一面」『現代日本文学全集』83、月報94 筑摩書房。
竹内好 (1972年6月)「武田泰淳全集第九卷解説」筑摩書房。
本多秋五 (1966年)『物語戦後文学史』(中) 岩波現代文庫 2005.9。
川西政明 (2005年12月)『武田泰淳伝』p187~193、p213 講談社。
- 8) 「影を売った男」1937.3、前出。粟津則雄はこの作品を中心に検討し、泰淳の魯迅観を「文学からも政治からも追放されることによって『事実』(現代中国の悲惨な現実——筆者注)に近付き、『事実』への無限接近を続けることによって文学と政治とを結び付ける」とまとめ、また魯迅の厳しい「呼びかけ」が泰淳の文学を「刻々に腐蝕解体する」と述べる。(「負の荷電」『すばる』創刊号 1970.6)
- 9) 「魯迅論」1936.11、前出。
「最近の中国文学」1936.12、前出。
- 10) 竹内好 (1944年12月)『魯迅』日本評論社。
- 11) 竹内好 (1969年11月)「ケジメの感覚」『グリーン版日本文学全集』第41巻解説 河出書房。
- 12) 「新刊の小説集を十何冊かかえてきて、そのガランとした二階の入口の卓の上におき、同人たちに自由に持って行かせた。……竹内がそれに一顧も与えずに昂然と出ていく姿を私は今もまざまざと頭に浮かべることができる。」松枝茂夫「二、三十年も昔のこと」『武田泰淳全集月報1』1978.1。
- 13) 『風媒花』をめぐる竹内の酷評と泰淳の弁解については拙論「方法としての『混血』——武田泰淳を中心として——」(『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要第8号』2009.2)を参照されたい。
- 14) 対談「薇を喰わない——魯迅文学をめぐって」1956.6、前出。
- 15) 藤田省三 (1981年5月)「竹内好氏に負うもの」(『竹内好全集』第10巻月報)において「魯迅文学の精神を二十世紀中国社会の苦悩と結びつけて理解しようとしたものは、竹内好氏であり武田泰淳氏なのであった」と指摘する。(加点は原文、下同)
- 16) 武田泰淳 (1938年11月)「土民の顔」『中国文学月報』第44号。
- 17) 藤井省三 (1985年4月)『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』p169~173、平凡社。
藤井省三 (2002年4月)『魯迅事典』p61~62、三省堂。
- 18) 雑誌『展望』連載中の4月13日から5月7日まで日本作家代表団の団長として文化大革命中の中国を訪れた。帰国後、二回で完結する予定の連載は五回まで伸びたことになった。この六章構成の作品は、第三章「紹興の雨」からは訪中以後執筆したものである。翌年単行本にまとめられた時には、さらに第六章が書き加えられた。
- 19) 堀田善衛 (1968年8月)書評「秋風秋雨人を愁殺す」雑誌『文芸』。
- 20) 泰淳・堀田善衛 (1973年3月)対談『対話 私はもう中国を語らない』p70、朝日新聞社。(傍線は筆者、下同)
- 21) 木下順二・竹内好・武田泰淳・堀田善衛対談 (1970年4月)「一部 近・現代中国における文学」『日中の原点から』p33、河出書房新社 1972.7。
- 22) 「中国の小説と日本の小説」1950.10、「魯迅とロマンティズム」1953.12、「女神と泥人間」1956.5.16、「薇を喰わない」1956.6など。
- 23) 「人民間の文化交流」1969.5、前出。
- 24) 「魯迅死後30年に思う」1966.10、前出。
- 25) 武田泰淳・竹内実対談 (1974年3月)「戦争と中国と文学と」雑誌『波』。
- 26) 尾上兼英 (1956年)「『孤独者』私論」『中文学会報』第9号、『魯迅私論』汲古書院 1988.3。

- 27) 武田泰淳 (1953年6月1日)「竹内好訳『魯迅作品集』」『毎日新聞』。
- 28) 武田泰淳 (1968年3月15日～19日)「わが思索わが風土」『朝日新聞』。
- 29) 武田泰淳 (1968年7月)「禁欲の青春」『小説現代』。
- 30) 趙暉 (2004年3月)「謝氷瑩と中国文学研究会——竹内好、武田泰淳との交誼を中心に——」『人文学報』。
- 31) 趙暉 (2004年3月)「謝氷瑩と中国文学研究会——竹内好、武田泰淳との交誼を中心に——」『人文学報』。
- 32) 『武田泰淳全集』第18巻の解題によると、1935、36年あたりに初稿が執筆されたものと思われる。1975年4月の『文芸展望』9号に発表の際には、加筆訂正が行われた。
- 33) 武田泰淳 (1947年1月)「美しさとはげしさ」に於いて、泰淳は「はげしい」「能力すぐれたやり手の形容」という意味の中国語「リーハイ」を用いて、特に中国の歴史と文学に登場する「はげしく強い女性たち(鳳姐、十三妹、白娘子、秋瑾、武則天)を取り上げ、中国文学の特徴である「はげしさ」を論述している。雑誌『桃源』。
- 34) 「わが思索わが風土」1968.3.15～19、前出。
武田泰淳 (1972年10月)「身心快樂 如入禪定——小説『快樂』について」雑誌『波』。
- 35) 武田泰淳 (1956年8月)「私と共産主義」『中央公論』臨時増刊号。
- 36) 「禁欲の青春」1968.7、前出。
- 37) 無実の罪に問われた点では、泰淳が取り調べの際受けた暴力と恥辱は司馬遷の屈辱と憤怒を思い出させる。「生き恥さらした男である」司馬遷は発憤して「記録によって、あらゆる事を為す」。(『司馬遷』1943.4) この司馬遷像が泰淳の原点と言われるので、「謝氷瑩事件」は泰淳に人間の本质という実存的な難問を投げかけると同時に、他人に理解されない絶望に耐えながら、書くことによって歴史にコミットして世界と対決しようという生き方に辿り着ききっかけにもなるのではないだろうか。この問題は後ほど考察する泰淳の秋瑾を介する魯迅理解にも繋がっていると思う。
- 38) 中野重治・椎名麟三編『現代文学Ⅱ 創作方法と創作体験』新評論。
- 39) 「わが思索わが風土」1968.3.15～19、前出。
- 40) 武田泰淳 (1960年)『快樂』雑誌『新潮』。
- 41) 丸尾常喜訳 (1984年11月)『魯迅全集 呐喊・彷徨』第2巻 学習研究社。
- 42) 丸山昇 (1965年7月)『魯迅：その文学と革命』p104、平凡社。
- 43) 永井英美 (1997年2月)「魯迅『孤独者』論」雑誌『野草』第59号。
- 44) 「中国文学と人間学」1948.4、前出。
- 45) 武田泰淳 (1954年2月)「動物」雑誌『文学界』。
- 46) 「私の創作体験」1954.8、前出。
- 47) 藤井省三 (1985年4月)『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』p174、平凡社。
- 48) 丸尾常喜 (1997年3月)『魯迅「野草」の研究』p409、東京大学東洋文化研究所報告。
- 49) 丸尾常喜 (1985年5月)『魯迅 花のため腐草となる』p189～190、集英社。
- 50) 代田智明 (2006年10月)『魯迅を読み解く：謎と不思議の小説10篇』p163、東京大学出版会。
- 51) 武田泰淳・竹内好対談 (1967年7月)「私の中国文化大革命観」雑誌『文芸』。
- 52) 武田泰淳 (1975年4月)「文学と私」、NHK「声のライブラリー」吹き込み。
- 53) 丸尾常喜 (1997年3月)『魯迅「野草」の研究』p64～65、p335～336。
- 54) 武田泰淳 (1959年6月)「PRあるいはCM的自伝」『群像』。
- 55) 武田泰淳・堀田善衛『対話 私はもう中国を語らない』、p61～62。

- 56) 中国人男女が捕虜として日本軍に連行される途中、女の方が男を引きずるようにして谷へ飛びおりて自殺する。その時女があげた叫び声が、悲しみの声でなく歓喜の声に聞こえたと書かれている。(武田泰淳・竹内実対談「戦争と中国と文学と」)
- 57) 日中戦争中夫を兵隊にとられた「廖のかみさん」は戦争が終わったら夫が帰ってくると安心したが、日中戦争後内戦がすぐ勃発したので、夫は今度共産軍と戦わなければならなかった。「廖のかみさん」は「威勢のよいさげびで」地元政府の徴兵関係者に夫を返せといろいろな騒動を起こし、留置場に勾留されたにしても「すかしても屈服」しなかった。武田泰淳訳「叫び」(菊地三郎編『現代中国短篇集』創芸社 1952.3)
- 58) 天野知幸(2009年3月)「マリヤはマリヤひとりの死を死ぬ：武田泰淳『聖女侠女』と戦後の上海」『金沢大学国語国文』(34)、p89。
- 59) 武田泰淳(1948年4月)「滅亡について」『花』第8号。
- 60) 武田泰淳・開高健・佐々木基一対談(1975年7月)「混沌から創造へ」雑誌『海』『武田泰淳全集 別巻二』、p359。
- 61) 兵藤正之助(1978年5月)『武田泰淳論』p258。兵藤の紹介によると、泰淳が初めて秋瑾に言及したのは、魯迅が日本文芸に接触した時代背景に言及した「中国人と日本文芸」(『国際文化』1943.9)であったという。
- 62) 「人民間の文化交流」1969.5、前出
- 63) 立石伯(1977年11月)『武田泰淳論』p132、講談社。
- 64) 郭偉(2007年11月)「武田泰淳的リアリズムの生成——小説『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』の方法——」『日本近代文学』第77集。
- 65) 武田泰淳(1959年11月)「竹内好の孤独」『現代教養全集』第15巻 筑摩書房。
- 66) 北京留学中の竹内好の孤独について、拙論「一九三八年の北京に於ける竹内好と『鬼』の発見——ある『惨として歓を尽くさず』の集まりを中心として——」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第10号、2007.11)を参照されたい。

主要な参考文献

『武田泰淳全集』(1978～1982年 増補版) 筑摩書房

『竹内好全集』(1980～1982年) 筑摩書房

夏曉虹(2004年8月)「紛紜身后事——晚清人眼中的秋瑾之死」『晚清女性与近代中国』北京大学出版社

郭偉(2007年11月)「武田泰淳的リアリズムの生成——小説『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女士伝』の方法——」『日本近代文学』第77集

佐々木基一(1974年)『武田泰淳中国小説集・付録』(全五巻)新潮社

重岡徹(1989年)「武田泰淳の女性像」『近代文学論集』第15号

藤井省三(1985年4月)『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』平凡社

藤井省三(2002年4月)『魯迅事典』三省堂

兵藤正之助(1978年5月)『武田泰淳論』冬樹社

本多秋五(2005年)『物語戦後文学史』岩波現代文庫

丸尾常喜(1985年5月)『魯迅 花のため腐草となる』集英社

丸尾常喜(1997年3月)『魯迅「野草」の研究』東京大学東洋文化研究所報告